

「環境」と「人」を未来へつなぐ 産直 はなゆき農場有機牛

日本の畜産業は、エサの価格の高騰や後継者不足などで、厳しさを増しています。こうした中、コープデリグループが生産者とともに二人三脚で取り組んでいるのが、「産直 はなゆき農場有機牛」。環境と人の両面で、未来のことを考えた取り組みです。



ストレスフリーな環境で育てる短角牛

放牧されているのは「日本短角種」という和牛の一種。「和牛」と言えば黒毛和牛ですが、黒毛和牛はサシと呼ばれる脂が入っているものが上質とされ、輸入穀物中心のエサを与え、牛舎の中であまり運動させずに育てます。一方、日本短角種は牧草だけでもよく育ち、サシは少ないものの味わい深い赤身が特徴。自然のサイクルに沿ってのびのびと農場を動き回することで、上質な肉質になります。放牧中も牛舎でも、スタッフが牛たちの体調管理やエサのチェックを欠かさず、丁寧に向き合っています。



上田さん(右)と中村さん。
牛へのまなざしが、愛情に満ちています

国産飼料で持続可能な畜産を目指す

北海道の釧路・十勝地方にある広大な放牧地。春に生まれた子牛が、母牛と一緒にのんびりと草を食ひます。育てているのは、北十勝ファーム有限会社代表取締役 上田金穂さんと、同社の有機部門である「株式会社 はなゆき農場」を任されている中村梢乃さん。繁殖から肥育まで、一貫生産しています。「なるべく地域のものを食べさせたい」と考える上田さんは「夏山冬里方式」という、日本の伝統的な飼育方法を取り入れています。暖かい時期は、山林草地で牧草を食べる牛たち



北十勝ファームでは、近隣の耕作放棄地を借り、スタッフが農地を耕してエサとなる作物を育てています

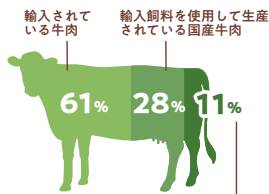
有機牛の生産をコープデリが応援

こうした北十勝ファームの取り組みは、日本の畜産業では珍しいもの。日本では生産の効率化や肉質のおいしさを追求した結果、エサの多くを輸入に頼っています。ところがコロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻、円安などで、エサ代や光熱費などの費用が急激に高騰。先行きが不透明なため、後継者が不足し生産者の高齢化が進んでいます。

こうした状況の中、国内で持続可能な畜産業を目指し、若手生産者を応援するため、コープデリグループが上田さんとともに取り組んでいるのが「産直 はなゆき農場有機牛」。北十勝ファームでの取り組みを応援し、「有機牛」としての認証を取得す

ることで、おいしくて環境にも配慮した肉牛の生産を目指しています。

「国産」の牛肉でも、エサも「国産」はわずか11%



国産飼料を使用して生産されている国産牛肉
出典：「令和5年度食料需給表」農林水産省

若手生産者の育成も応援！

有機牛の認証を取得するためには、専用の牛舎を建て、エサや備品もこれまでのものと分けるなど、さまざまな費用と時間がかかります。その間の負担を少しでも軽くするため、コープデリが行った支援が、生まれた子牛を購入し、生産者さんに預けて管理代を毎月支払うというものです。経営面を支援することで、日本では数少ない有機牛の肥育を本格的に進めることができました。

コープデリが支援していることがもう一つ。それが若手生産者の育成です。今回「産直 はなゆき農場有機牛」



画像はイメージです

牛」を任された中村さんは、スタッフの中心となる一人。日々の管理だけでなく、経営面も学んでいます。環境のこと、生産者のこと、さまざまな面で未来のことを考えた「産直 はなゆき農場有機牛」。宅配の商品カタログ「Vie Nature」で取り扱っています。生産者への何よりの応援は、組合員の皆さんが食べること。豊かな赤身を味わいながら、食の未来を考えてみませんか？

「産直 はなゆき農場有機牛」の取り組みが農林水産大臣賞を受賞

あふの環2030プロジェクト(農林水産省、消費者庁、環境省)が主催する「サステナアワード2023」で、「産直 はなゆき農場有機牛」の取り組みが農林水産大臣賞を受賞しました。畜産業界におけるサステナブルな取り組みがまだまだ進んでいない中、コープデリが有機牛の可能性を見だし、牛を買って提供するという新しい仕組みや、生産者の持続可能性を担保している点が評価されました。上記の二次元コードから動画をご覧ください。



左から、生産者の上田金穂さん、中村梢乃さん、コープデリ連合会熊崎伸理専長

Webでも「産直 はなゆき農場有機牛」をご紹介します!



コープデリグループ
サステナビリティサイト

コープデリグループは、事業と活動を通して「SDGs(持続可能な開発目標)」の達成を目指しています。



今回の取り組みは、目標12:

つくる責任 つかう責任

につながっています。

12 つくる責任 つかう責任

